

トオリモノ

柎千櫨

潮風がふく。

「たとえば、きみがそのさびしくふるえる右足を一世一代の勇氣ふりしぼり一歩ふみだしてみせたとしよう。生きることをとめ、生きることをがんばり、生きることをひつしと生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、生きて、きみが、さいごのさいごまであえいだ、おぼれる呼吸。それが今際にもたらずものは、おぼれるような、虚無だ。私たちに羽はない。翅もない。飛行はできず、浮遊もできない。ともにおどってくれるのはついぞさびしい墜落ばかり。苦痛とおよいだみじかい人生せいを、なおも苦痛で締めくくるなど、あんまりかなしいじゃないか。なあ、どうだろう。私の手をとってみてはくれないか。お茶をのみにいこう。ちょうどこのあいだ、ケーキのおいしい隠れ家を見つけたよ。フルーツがふんだんと盛られていて、タルトはずっしりおもたいのだが、丁寧なしごとをされたクリームはさっぱりとろけるさわやかな味わいで、あれは、なかなかの上物だぞ。きみの舌もたいそう

納得するだろう。それから、そうだな、そろいのスカートでも買いに行こう。わかつている。きみはそのような服を好まないだろうが、なに、この私が見繕うのだからなんにも心配いらないよ。格好よく仕立ててあげよう。それからふるびた電車を乗りついで、すこし遠いところへいこう。島をでて、町をでて、山がいいか、海がいいか。ああ、湖なんていうのもよいだろう。いずれにせよ、それは道行でなやめばいい。なんにもあせることはない。私たちはまだ思考できる。きみ、私たちはまだ、思考できるんだよ」

渚のむこうでうみねこが、汀のほとりでねこがなく。

潮風がふく。

ふいている。

ざあん、ざあん、とうち寄せる、沫のしぶきがしろく咲く。防波堤はまだねぼけまなこ。夜のなごりであおぎめた腕を、ぼんやりぼうつとひろげては、波をふさいでばかりいて、風のほうには気をかけない。

あのこをてまねく潮風を、ちつともふせごうとはしない。

そらが、うみが、あおくあけゆく。

ああ、あけていく。

あけていく。

今日はじゅうぶん晴れるだろう。梅雨もようやく過ぎ去るだろう。明けの
ひかりの間よりこぼれる空は濃くあおく、海もくろぐろとあおく、きらき
ら、ひかる。きらきらと、ひかる。うつくしく波のひかる日は、ねこのく
のとびらがひらく。海のむこうにそれはある。あのこのなじもしろくひか
る。しろくなめらかにひかっている。あわい蜂蜜いろの髪は夜明けのまどろ
みに染められ、あじさいのいろをはらみながら、さわさわとゆれる。

ああ、ゆれている。

私はアスファルトをふみしめ、あのこはとおく、コンクリートのうえ。防
波堤のつめたいグレイを、サンダルの木底にふみしめる。

渚のうえにたっている。

ざあん、ざあん、とうち寄せる。

うみねこはとおく飛びさった。二ひきぼっちのねこばかり、じっと私たちをみている。あのこのくびすじが、さらさらひかる。

さらさら、ひかる……。

五月三十一日。月曜日。

日記をつけようとおもう。

常々それをしてみたいとはおもっていたのだが、私はどうにも筆記が得意ではない。文字というやつは私に似て、落ちつきというやつがなく、すぐにあちこちおどりだしてしまう。じつとしていないばかりか、書いたそばからほどけだし、びろびろとしたつたになってあそびだしてしまうものもある。はねる、よじる、とびあがる。なんだかちつともわからない。まったくどうにもしようがない。

だが、これならば、これというのは、ひさしぶりにおばあちゃんのへやを探索していたら見つけた、すこしふるいボイスレコーダーのことで、これならばなんの問題もなく、この私でも日々を書きつけることができる。レコーダーをもつてして書きつけると言うのはいくぶんおかしいものだが、録音する、というのではちよつとばかり味気ない。ここはやはり、書きつけると言うっておきたい。

これのデザインは、なかなか趣があつてよい。てのひらからすこしはみ出すか、はみ出さないかくらいのはどよいおおきさ。くろい地肌はかざりけなく、つるりとつめたく、操作のボタンはすくなく、必要なものだけが過不足なく、そろそろとほそい胴体のなかにとんでんたんとおさまっている。てっぺんのところには、マイクとおぼわしき銀色のでっぱりがあつて、それが全体のバランスをすこし損ねて、いびつさに愛嬌をおぼえる。もちろん音質もじゅうぶん良い。さすが、おばあちゃんの選んだいっぴん。まちがいがない。彼女のセンスと私の趣味が違つたことはいちどもない。

きょうは望海^{のぞみ}がきた。

夕方、おそろく五時をすこしまわつたくらいのことだ。

私の家と呼び鈴はない。ふるびた家だ。おばあちゃんも、そのまたおばあちゃんもこの家に住んでいたというから、ほんとうにずいぶんながくある。のっぺらとした平屋建て、瓦ぶきの屋根、くろい杉の板、漆喰のしろい壁。

なかのつくりも相応にふるいが、手入れはきちんとしているし、水まわりなどはあたらしいつくりとなっている。居間を囲うようにして広縁があり、面する庭は島の外っかわを向いていて、いまの時期は風がほどよくもちよいが、冬場はさむいおもいをする。そのような家だから呼び鈴はないし、鍵もほとんどかけていない。だれもかれも顔見知りのせまい島。どろぼうなどすればどうなるかなど、火をみるよりもあきらかだ。

懐古^{レトロ}的な磨り硝子の引き戸が、こん、こん、とおとをうたう。あのこがもたらす几帳面のノックのおとはとてもこちよい。硝子ではなく、せまい木枠のところをたたく。かるく、湿ったおとがなる。

「やあ」

引き戸をあける。

敷居のむこう、望海がいる。

ぼんやりとした顔で立っている。

望海はいつも、制服をきつちりと着ている。

トオリモノ

柁千樫

2019 年 11 月 24 日 第 1 刷発行

発行元 千樫堂

<https://chikyudo.org>

masakichikashi@chikyudo.org

Twitter » @masakichikashi

装幀 柁千樫

表紙および口絵イラスト shama

印刷・製本 コミックモール

©Masaki Chikashi 2019

Printed in Japan

N.D.C.913 120P 84mm

本書の無断転載・複写・オークションやフリマアプリ等への出品はご遠慮願います。

乱丁・落丁は在庫の限りお取替いたします。発行元宛までご連絡ください。

〔余白〕天 55.5mm 地 24mm ノド 16.75mm 小口 14mm 〔フォント〕 韶明朝テキスト 〔本文縦数〕 11Q 〔本文行間〕 11H 〔組版ソフト〕 Adobe InDesign CC 2019 〔表使用紙〕 アートポスト 180kg 〔本文用紙〕 書籍用紙ナチュラル 〔カバー用紙〕 ロベール 110kg ホワイト